

## 2019年度薬剤学教科担当教員会議 議事録

日時：2019年8月30日（金）13:30～17:15

場所：北海道大学大学院薬学研究院（〒060-0812 北海道札幌市北区北12条西6丁目）

出席者：85名（学内スタッフを含む）

### 1. 委員長、副委員長、初参加、異動の先生ご紹介

会議は定刻通り開始された。初めに、本年度委員長の原島秀吉先生（北海道大学）が、最近の天候不順や気温について触れながら、開催の挨拶を行った。次に、副委員長の福島昭二先生（神戸学院大学）、水間俊先生（帝京平成大学）が紹介された。続いて、本会議に初参加および異動された先生方から簡単な自己紹介をいただいた。

### 2. 第104回薬剤師国家試験問題検討委員会「薬剤」部会報告（資料別添1）

神戸学院大学 教授 福島昭二 先生

福島先生から、2019年5月11日に神戸学院大学ポートアイランドキャンパスで開催された第104回薬剤師国家試験問題検討委員会「薬剤」部会で討議された内容と評価結果について報告があった。総合評価として、薬剤学分野の問題は「出題範囲のバランスが良く、考える力が必要な問題が多かった」という評価が多く、また昨年に引き続き国家試験当日の訂正問題がなかったことから、今後この水準での出題が期待されることを述べられた。また、必須問題では適切なレベルであり良問が多かったこと、理論問題は思考力を問う問題も出題され、良問が多かったこと、実践問題では、複合性に大きな問題はなく、概ね良問が多かったことを述べられた。一方で、誤りが指摘された問題があったこと、問題の重複があったこと、正解の根拠に疑問のある問題があったこと、用語の使用が不適切である問題があったこと、また、実務で出題しても良い問題があったことが指摘された。また、複合問題において全問が正解できれば自ずと次問が正解でき、次問の必要性があるかという指摘や、実務実習で経験しているかどうかで差が出てくる問題が散見されたという指摘があったことが述べられた。以上の全体的な評価の後、不適切との意見が寄せられた個々の問題を取り上げて解説された。その後、フロアからの質問・討議が行われた。

### 3. 第104回薬剤師国家試験問題、特に複合問題の内容に関する講評（資料別添2）

岐阜薬科大学 教授 北市清幸 先生

北市先生から、「実務」部会と「薬剤」部会の両報告を踏まえ、また103回との比較も行い、複合問題を評価した結果について、私見として講評がなされた。総合的に、104回は複合問題の実務は難易度が下がり正答率が高くなったこと、薬剤は正答率が低くなったこと、全体として難易度は103回と比較して同程度であったことが述べられた。また、授業で（一部）教えていないという意見は前年と比較して減少し、良問が増加した点も述べられた。また、実務関連の講評として、他分野の問題とのすみわけが困難な場合が見受けられたこと、また、実際のシチュエーションは考えにくい設定があるなど、限界があり、問題の設定が実際の臨床現場とは乖離し、不自然な場合も散見されたが、しっか

りと考えさせる良問が多く、難易度の設定も適切であったことが述べられた。個々の問題の解説では、問題のねらいや背景を解説し、考え方・正解の導き方を、添付文書やその他の資料での根拠も含めて説明した。過去国家試験で出題された知識を含む問題も明確に指摘し、深く踏みこんだ講評を行った。今後については、定型問題・過去問への十分な対応、新薬の PK・製剤的知識への対応が必要であり、また、インスリン製剤、喘息（デバイス）関連、がん疼痛制御の知識が定番化してきた点、褥瘡対応などの在宅に関連した薬剤への対応の必要性に言及した。すなわち、他の分野との統合した疾患、治療の流れの理解に関する授業が必要であるという主張がなされた。

#### 4. 特別講演 I 「薬学教育とサイエンス：日本薬学会の取り組み」（資料別添）

京都大学大学院薬学研究科 教授/日本薬学会 会頭 高倉喜信 先生

高倉先生は、まず日本薬学会の薬学教育に関する取り組みおよび若手研究者の支援と次世代を担う薬学研究者の育成に関して述べられた。コアカリの成り立ちについて触れられ、改訂コアカリが短期間で作成された点、改訂コアカリの改訂をすべきという議論が出てきている点を述べられた。また、改訂コアカリ内における薬剤師として求められる基本的な資質に、「基礎的な科学力」および「研究能力」などのサイエンスを意識した項目があり、薬学教育とサイエンスは表裏一体である点を強調された。一方で、近年の日本の科学力が低下している点、博士（後期）課程進学者数は減少している点を述べられた。このような状況は研究力低下にとどまらず、将来薬系大学教員となって薬学教育を支える人材、Pharmacist-scientists となって後進を育成する人材の大幅な不足につながる点を指摘され、この危機感を全ての薬学関係者が共有することが重要であると強調された。また、学生の博士進学への支援事業の紹介がなされた。さらに、文部科学省における 2040 年を見据えた高等教育の改革について紹介され、世界をリードする研究者の育成・支援の強化を通じ、日本の研究力の向上を図り、絶えず新たなイノベーションを生み続ける社会を目指していく点、また、それがこれからの社会的ニーズに貢献する薬剤師像を合致することを述べられた。続いて、4 年制・6 年制に関する入試方法や入学定員の最近の変化について触れられた。国公立大学の Pharmacist-Scientist の輩出が従来の 1 割に留まっている問題点を解決するための薬学教育改革に関する大阪大学および京都大学のそれぞれ大きく異なる取り組みについてご紹介された。

#### 5. 特別講演 II 「科学的医療に薬剤師が貢献できるツールとしての薬剤学～6 年制教育から見てきたもの～」

北海道大学大学院薬学研究院 教授 井関健 先生

井関先生は、長年の北海道大学病院薬剤部長としての経験、6 年制教育を経た薬剤師の受け入れ経験に基づき、臨床現場の視点からこれからの科学的医療における薬剤師のあり方についての考察について発表された。チーム医療や多職種連携の重要性が増す中で、薬剤師は医薬品情報を正しく収集し、活用する能力が求められる。また、錠剤の分別作業を自動で行う装置の販売や AI の急速な発達により、5 年程度で薬剤師業務の中の単純作業はそのようなロボット・AI にとってかわるという予測を述べられた。すなわち、従来、薬剤師は「医薬品の専門家」として表現されていたが、現在では「薬物療法の責任者」あるいは「医薬品安全管理責任者」としての薬剤師に期待がかかっていると主張された。すなわち、治療エビデンスの科学的考察や批判的な解析能力が求められると述べられた。また、地域

包括ケアシステムにおいて、地域の DI ネットワークは病院・薬局間の双方向の情報交換とその活用が重要であると述べられた。

## 6. 総括

本年度委員長：原島秀吉先生（北海道大学）より、本委員会参加者やスタッフに対するお礼が述べられた。また、来年度は、神戸学院大学 福島昭二先生が委員長となり、神戸で開催する予定が紹介され、会議を終了した。